伊地知鐵男文庫蔵『北野社松梅院引付』に見える、二、三の記事について

岩下紀之

本書は早稲田大学図書館に帰した、伊地知鐵男文庫中の一冊であって、北野神社松梅院に由来する古記録である。全体が何らかの文書を再使用していて、紙背文書を有する。第一丁は元来の表紙であったらしく、褪色が著しい。中央に、

引付　明応五年　同四年分少々年之

と記し、左下すみに、禅尊と署名し、花押を付する。以下全丁四十二丁。楮紙を用いる。紺地の布製の表紙をほどこすが、本文の虫損が表紙まで達するので、早大に帰属する前に製本されたものであろう。

史料纂集に『北野社家日記』が収録されている。纂集本は『松梅院引付』の日次記を翻刻したのであるが、この伊地知本はいわば別記であり、だいたいは明応四、五年から以降を記しているが、その他それ以前の先例をもしばしば記載する。

記者の禅尊は、纂集解説によれば、松梅院禅豫の子、幼名春松丸で、明応二年九月八日の条に「春松丸物云早言立願在之」との記事もある。史料纂集本の明応三年記までの記者は禅豫、明応八年記は禅光代官記で、禅尊の日次記は伝わらないようである。

北野神社の歴史的意義から見て、本書の価値はきわめて重要である。ここでは文学関係の二、三の記事を紹介してみたい。原文の用字についてはおおむね通行の字体をあて、私意によって句読点をほどこした。筆者の手にあまる箇所には横に（カ）などと注記したが、なおあやまりの多いことを畏れる。

1

この時期の世上の物騒なことは、洛北の北野社にも波及している。第一、松梅院引付の記者禅豫その人が、明応三年正月十四日殺害されているほどであり、ここに翻刻する記事も、そのような殺伐な時代相のあらわれと解すべきであろう。日連歌所[注一]については、『蜷河家文書』六五三、六五四、七一五に、天文から永禄ごろにかけての衰微をうかがわせる記事がある[注二]。

以下の翻刻では、日連歌所坊主蔵久なるものが夜盗をはたらき、成敗されたむねの事件が伝えられている。前記『蜷河家文書』六五四には、北野外会所の坊主蔵円なるものが追放された記事が見え、伝統ある北野社の連歌は、このころどのようにとりあつかわれていたのであろうか。

明応六

一　五月廿二日松光院へ夜盗入云々。然而、彼坊夜盗長本人日連歌所坊主蔵久也。同類鎰ノ町ニ与五郎子猿云々。仍同六月五日、為　宝成院香西忠兵衛ヲ相語日連歌所へ押寄之処、蔵久逃行ヲ紙屋川面ニテ敵(ウツ)留早。則与五郎所ヘ雖押寄之、父子共ニ折節他行云々。　両所雑物已下悉令乱妨者也。以後松梅院へ以使者此子細申云々。御社務同奉行へも前ニテ不案内申。如此所行前代未聞事也。雖然目代并公文承仕成孝罷出。同香西衆(カ)共ニ両所事注符早。

2

将軍足利義高は、文亀二年、細川政元と隙を生じ、政治的には全く無力な存在となる。もとよりそれ以前に実権をふるったことがあるはずもないけれども、本書三十六丁には、将軍と細川政元らの、北野社での詠歌が記録されている。

文中に「御皮袴躰」とあり、この服装での社参は非公式のものと思われる。とすれば、この一行は将軍側近の人々ということになるのであるが、冷泉為広、細川政元、高国、伊勢貞斎といった人々がそのような位置にあったのであろう。政元横死のあと辣腕をふるう細川高国が、まだ六郎と称して顔を出し、文学愛好家の片鱗をすでに見せている。

この日については、『北野社家日記』に記録があり、合わせ読むべきである。翌日梅寿丸が出仕し、「目出度由」で「酒モリ」があったことなどもわかり、興味深い。

一、明応九年二月十日　公方様御野遊御次

社頭へ御参在之。下長床ヒサツキ畳ノ上ニテ、御祈念在之。御行衣御皮袴躰ニテ御参之間、社例儀式無之云々。則於会所海老名三郎左衛門尉御一献ヲ参スル間、当坊柳五荷取居、五目録、折帋ヲ以テ進上之。梅寿丸持参云々。細川京兆被参。御詠歌在之。同当坊梅ノ題短冊ヲ給(カ)云々。幼少間禅慶相副テ参也

梅　トヲリノ題也　　義高公方様

仰ぬる神のめくみに梅か枝をいく代ともなく此野にそみん

為広冷泉井殿

ことの葉の花まちえてや神垣の梅も色香をわきてそふらん

永康藤兵衛督

あふく神のちかひをうけて我君の千世のめくみにさくやこの花

政元細川京兆

松梅も君まちえてや此春はいま一しほの色かなるらん

高国細川六郎

心有て梅ニ吹らし神風は匂をちらし花をちらさて

貞斎伊勢七郎

あひにあひて猶色そふる梅かえの匂や君か袖にとまらん

梅寿丸松梅院

梅花にほひほのかに出る日の光のとけき春の空哉

信通本郷宮内少輔

此野への神のいかきの梅花君ならてやは誰か見はやさん

高定

神屋川千世をなかるゝ水とてやちらても梅のかけをせくらん

国資飯川山城守

君か世を神もうけける色みえてにほひらくるみつかきの梅

明順宝成院

君かためけふさきあへる梅花千世のかさしを神も知るらん

3

足利氏は代々連歌を好み、尊氏義詮の二代は『菟玖波集』の有力作者である。また、義教以下は『新撰菟玖波集』作者で、特に義政は句集が残っている。このようにそれぞれの将軍がかなりの作品を詠み、北野社とも縁が深いのに対し、三代義満将軍が室町幕府最盛期を成立せしめたにもかかわらず、あまり作品を残さないのは惜しまれる。応永期の連歌を宗砌以下の連歌師が評価しなかったためか、応永十五年三月の後小松天皇の北山殿行幸にあたっての百韻二巻のほかは、『空華日用工夫集』[注三]『久我家文書』[注四]などにわ

ずかばかりを見るのみである。本書三十八丁以下に足利義満の発句九句を見出すのは、まことに貴重なことである。

北野社での永享五年万句以前の作品が断片とは言え、ここに姿をのぞかせているのも、あわせて注意すべきであろう。なお応永十年十二月八日の義満の北野参籠のことは『大日本史料』に見えている。

鹿園院殿様御成

一　応永十年五月廿五日御法楽連歌在之

　幾千世そ宮井年ふる梅の雨

　松さへかほる風のたち花　　聖

一献如先之用意之御小袖三重御太刀御馬如先之也

八月廿五日御発句

　花さきぬ此野丶草を宮所

　いかきみかける露の玉松　　聖

注五

十二月九日自夜御参籠在之。同十日御千句

　梅もひさ松も千代ふる宮居哉

其十月十二日御法楽在之御発句

　松しろく雪を御池のうすこほり

　梅のさかりや春を待らん　　寿王丸

応永十一八月十二日御発句御連歌在之御句

　紅葉にも梅は久しきいかき哉

　神も千とせを松の秋風　　聖護院

同十二二月十三日　御句

　千代もみん此神垣の梅の花

同同十二月十二日御句

　冬梅の花の匂のいかき哉

同十三正月十一日御句

　松ふりて梅に久しきみや所

応永十四　正月十二日一日御千句御発句

　神に千世なれこし梅の匂哉

四季御参籠中之御発句也

注一　北野天満宮の連歌会所については金子金治郎氏『連歌総論』96ページ以下。大阪天満宮の連歌所については、鶴崎裕雄氏「連歌と大阪天満宮の連歌所」（『大阪天満宮史の研究　第二集』）

注二　六五三番文書に「外会所及大破候間、令修理、日連歌不可退転旨・・・・」とある。

注三　永徳三年七月八日、至徳元年十一月晦日参照。

注四　文書番号一六八九参照。

注五　句順を入れかえる意味であろう。原文のまま翻刻しておく。